

ひので映画大使最新版

第35回映画大使「遺体 明日への十日間」

期 日 平成25年2月23日(土)
 場 所 ワーナー・マイカル・シネマズ日の出

【作品介绍】

2011年3月11日に発生した東日本大震災。津波などにより多くの尊い命が失われた。発見された遺体が学校の体育館に次々と搬送されてくる。身元が判明し、家族との悲しい再会を果たす者、未だ身元すら分からず番号で呼ばれる者…。そんな状況の中、一刻も早く家族と再会させるため、検死、DNA採取、歯型のデータ収集などが医師や歯科医により行われていく。また、ボランティアや市の職員も遺体の尊厳を守りながら、懸命に遺体と向き合い、尽くしていく…。そんな報道では伝えきれなかった、遺体安置所の真実を伝える作品です。



(C) 2013 フジテレビジョン

映画大使の「感動と感想」をお伝えします。

このコーナーは、映画を見た感想や感動を、ストーリーは伏せて「みなさん」に紹介するコーナーです。

▶ 映画大使の「第一声！」

あのような状況の中でも懸命だった人に、頭がさがる思い。

冒頭から涙が止まらなかった。

リアルな真実描写に驚いた。



今回参加された、映画大使の皆さんです！

▶ 映画大使の「映画のツボ！」

Aさん

「おくりびと」という作品がありましたが、人間の尊厳を描いているという意味では似ていたと思います。被災場所によってはもっと悲惨な状況だったと思うし、私の親戚が福島にいて、どうしようもないという話も聞きます。本当にたまらないですね。ドキュメンタリータッチで映画的な感動はなかったように思いますが、観るべき作品だと思いました。

Bさん

人の尊厳もそうですが、優しさ、愛情、強さや弱さなど、全てが胸に迫ってきました。残された一人一人に、それぞれのこれからの人生の中で、「生きていて良かった」と思える日が来ればいいなと強く思いました。

Cさん

ストーリー的ではあまりなかったのですが、このシーンがどうだった、という感想はないのですが、「遺体」というものに焦点をあてていたのは衝撃的でした。映画の感想というよりも、「日々自分がどう生きているか」という事が問われるような、そんな風に思わされた作品でした。

Dさん

これまでの震災の報道で、表面的な事は伝えられていたけれど、改めて、具体的にはなんにも知らなかったんだな、という事を感じさせられました。東京でもニュース映像で津波の映像はすぐ伝えられましたが、同じ被災地でも、海から少し離れ

ている所では、停電のせいで、津波が起きている事も分からず、後から現実として見せつけられて実感するという、そういう事も知りましたし、歯科医が開口機で遺体の口をあけるなど、具体的な部分も知る事が出来ましたし、そういう人達に支えられているのがよく分かりました。

Eさん

画面で観ても、悲惨さは伝わったのに、実際はもっと悲惨だったんだろうと思います。映像では伝わらない、においや寒さや、また、もっと騒然としていただろうし、大変だったと思います。2年経ちますが、今、何が出来るのか、という事を思わせる作品でした。

Fさん

私はその頃、仕事で青森に滞在していましたが、震災後停電になり、その後津波の事を知ったのを思い出しました。映画的には、ドキュメンタリー的な進め方で、過激な演出も無く、淡々と描かれていました。演じている役者さんも演技が上手く、抑えた演技で、現場のリアル感を伝えていましたね。作り手側の真摯な気持ちが伝わりました。

Gさん

一人一人の遺体に対して、遺族や医者や多くの人達の関わりというか、ドラマがあるんだなと思いました。今まで漠然とし知らなかった事を知る事が出来ました。遺体に話しかけるというのは、大切な事だと思うし、こんなに「生と死」を考えさせる映画は初めてでした。皆に見て欲しいと思います。

📌 作品の内容(印象に残ったシーンなど)

- ・重いテーマでしたが、見応えがありました。
- ・西田敏行さんが演じた方は、実際にいらっしゃる方をモデルにされていて、この間テレビに出ていましたが、西田さんにそっくりでした。西田さんも兄弟と思ったそうです(笑)
- ・エピソードなども実話に基づいているんですね(原作はジャーナリストの石井光太氏の著作「遺体 震災、津波の果てに」で、知られざる事実が描かれています)。
- ・住職のお経の声が詰まる所(國村隼さん演じる)は、こちらも胸が詰まりました。
- ・自分の身近な人が亡くなったり、安否が分からないのに、安置所で働いていた人に頭がさがる思いです。
- ・今まで遺体と関わる仕事をしていなかった人達が、凄手数人の遺体を運んだり、関わったりするのは、肉体的にもそうだけでなく、精神的にも大変な事だったと思います。
- ・どんなに辛くても、一生懸命やる事で、救われる事ってありますよね。
- ・この作品を観る事によって、震災で亡くなられた方への供養になるような気がします。

📌 まとめ

多くの命が奪われた東日本大震災。発生から間もなく2年が経とうとしています。この作品では、報道では伝えきれなかった、「遺体安置所」の真実が描かれています。廃校にはなっていますが、普段は子ども達の元気な声が溢れるはずの学校の体育館が、一転して地獄絵図と化す様子は、「生と死」という意味で対照的でした。そして、「遺体」が家族に見つけてもらう過程には、あれほどまでの人々の苦勞と想いがあったのだと、実感しました。

東京という被災地とは離れた場所において、身内や知り合いが被災地にいなかった人間にとっては、水やガソリンが不足し、計画停電に不安だった事が一時的に起こっただけで、あまり、「実感」という意味では、しづらと思います。しかし、この作品で壮絶な「真実」を見た事により、まるでその場に引き出されたような錯覚に陥り、「自分だったら何が出来たか?」という想いが強く湧き上がりました。

この作品では、遺体(勿論、役者の動かぬ芝居のもの)が多く映し出されます。だからこそリアルなのですが、決して目をそらさず、一人でも多くの人に観てもらいたいと思います。また大切なのは、今、ここで発生するかもしれない、同じ様な災害に対し、準備を怠らない事です。

ワナー・マイカル・シネマズ日の出で是非ご覧ください。

➡ 関連ページ: [これまでのひので映画大使](#)

➡ 関連ページ: [ひので映画大使のトップに戻る](#)

問合わせ先: 教育委員会文化スポーツ課社会教育係
電話042-597-0511(内線541)

[◀ 前のページへ戻る](#) | [ページトップへ](#) ▶

〒190-0192 東京都西多摩郡日の出町平井2780番地 電話 042-597-0511(代表)
Copyright © 2011 Hinode Town All Rights Reserved.

[サイトマップ](#) | [このサイトについて](#)